黒木先生の大経大

――頂いた二冊の本と，人間科学部の昔話と――

城　　達　也

一．乾坤一擲，黒木先生

「とにかく城さん，なんだかんだ言うても，楽しみながらやろうな」。大学近所の焼鳥屋でいつも，学校のあり方をひと通り議論したあと，毎回必ず黒木先生が私に言ってくれた締めの言葉である。

努力して目標を達成することについて楽しんでやることは，心理学において，ストレス耐性に強い力を意味するレジリエンスの１つの特性だそうだ。頑張ってよい大学にしよう，しかし僕たちのストレスは溜め込まないようにしよう。臨床心理学者として，またカウンセラー実務家としての黒木先生の前向きさと優しさとがこの一言に詰まっている。

2002年（平成14年），大阪経済大学は教養部の看板を書き換えて「人間科学部」を設置した。黒木賢一先生や私はその設置のために本学に呼ばれた。1991年（平成３年）に「大学設置基準」のいわゆる「大綱化」がなされて，戦後の新制大学に義務付けられていた教養部が法令上の根拠を失う。すでに私は前任校の熊本大学にて教養部解体と教員の各学部への分属を経験していた。1997年（平成９年）のことであった。国立大学，しかも旧制五高というリベラルアーツの牙城であっても教養部は解体となったのだから，当然に私学に教養部を維持する余裕などないはず。ところがそれでもここの大学の教員たちは2002年まで粘りに粘ったのである。

ここに人間科学部設置時のポスターがある（写真）。現在の国際共創学部の金のかかるテレビ CM とは比較にならないほど貧相なものだが，女子学生らしき人物が驚いて「経済の大学に人間科学部が！」と言っている。しかし驚いていたのは学内の教職員たちだろう。新たに特定の分野が出てくると潰す。経済学分野だけはどれだけ増やしてもよい，というのが暗黙の了解らしい。

のちに私たちは知ることになるのだが，教養部廃止と専門学部設立に至るまでには様々な紆余曲折があったらしい。だが，根本は簡単である。ようは教養部の教員たちは自分たちの分野のポストを維持したかっただけだ。将来に使える古い遺産など大経大にない。設置申請作業をした初代の人間科学部長，滝内大三先生の心労は察するに余りある。たしかにどこの大学でも教員たちの行動原理は「ポスト確保」である。しかし国立大学においてすら，もはや誰も希望学生が来ない哲学講座やドイツ語・ドイツ文学講座などの存続に私は大いに疑問を持っていた。ましてや全国的には誰もその名前を聞いたこともない大阪の

弱小私学の教員たちが自分たちのポスト維持に躍起になっているのは正直，情けなかった。

心理学と社会学を中心とする学部をつくるという建前で連れてこられた私たちは，その後ずっと大変な目に遭うことになる。もちろん私たちもそれぞれの都合があって来たのだから仕方ない部分もある。それにしてもやはり正直，選択の失敗だった。学内には誰もわれわれを歓迎するものはいなかった。実際にはその後も約50名にも及ぶ「旧教養部ポスト」というニンジンを前にして，教授たちの紛争はしばらく続く。一方で教養部から引き続く教員たちは，心理学など最小限にしてあとは自分たちの分野を維持しようとする。他方で経済学部や経営学部など既存の専門学部は，旧教養部のポストを早く強奪したいとよだれを垂らしていた。

黒木先生や私は，専門教育課程をわずか人数のスタッフに丸投げされたまま，さほど勉強意欲もない学生たちを前にして途方に暮れた。そのほか大勢の教員たちは相変わらず教養課程ばかり担当しながら，ポスト維持の画策に奔走していた。私らはなぜか，専門課程の必修科目とともに教養課程も担当させられた。ほとんどの教室は，嵐のような「学級崩壊」状態が続いた。

順序が多少違っているかもしれないが，私の記憶では，2002年度に教養部を人間科学部にしてからもさまざまな混乱が続いた。まずは①（教職員組合色の強い）職員たちにも投票権を与える学長選挙制度の改正，②旧教養部＋経営情報学部連合軍を抑えて経済学部・経営学部連合軍からの候補者による学長職の奪取，③学生自治会を牛耳っていた革マル派学生の退学処分，④そして参謀役の教授の特任教員雇用の却下と，着々と進んだ。さらにこの後も⑤人間科学部となった旧教養部ポストを経済学部などへ移譲する方針が続いた。

とくに最後の⑤番のように，経済学部所属の当時の重森暁学長らが考えた「教員ポスト配分案」が完了するまで，人間科学部の新規教員採用は禁止という全学措置がなされたことは，黒木先生や私ら人間科学部の専門教育を担わされた教員にとって非常に厳しい処置となった。当初は実験心理学が2名，臨床心理学が黒木先生を含めて3人，合計わずか5名だけだった。2006年度にようやく心理学に一人追加されたものの，それでスタッフは

やっと心理学 6 名，社会学 2 名だった。あとは哲学，教育学，体育科学などの教員が補った。旧教養部から流れてきた50名以上の教員が人間科学部所属であったが，実際に専門学部教員として働いていたのはわずかであった。

当然ながら学生たちからは文句が出た。誰も専門課程の先生がいないではないか，と。しかし人間科学部以外の先生たちの主張では，「人間科学部の教員は13名だけ」だった。まだ37名の減少が必要というのだから，50名維持だと主張する旧教養部の先生と全学的な対立となった。お互いの認識の差。当時の人間科学部長だった柏木正先生は「事前のボタンのかけ違いだ」と弁明した。私たち新任教員の知らないところで，設置前から曖昧な策略がなされていたのだろう。

学長の立場で学生教育を放置した当時の重森元学長の責任はいまも大きいと考える。ここから現在まで同じ教員グループから学長職が出ているが，現在に至るまで「学生教育」よりも「教職員が主役の大学」に変わりない。「象牙の塔」といえばカッコ良いが，せいぜい「枯木でつくったトーテムポール」でしかない。熊本大学でもたしかに教員たちは研究中心の組織であった。しかしさすがに腐っても国立大学であり，研究組織としてまだ成り立っていた。大阪経済大学は戦前の専門学校上がりである。結局は学長を手中にしたほうが主導して，人間科学部の分割政策が始まった。連合軍よろしく，まさにベルリンは 4 つにバラバラにされたのだった。

そんなあるとき，2005-6 年ごろだったか，さきほど並べた④番の騒ぎが起こった。定年退職する教員に対して，人間科学部教授会がさらに三年間の延長措置をして，特任教員として承認したのに，理事会が却下した。表向きの理由は何だったか私の記憶にはない。「革マル派を支持していたから」だったか？しかしもしそんな理由ならば，他方で共産党周辺の教授たちがどんどんと特任教授や名誉教授になっているのもおかしなことである。

まだ黒木先生や私には実際の理由はわからなかった。しかし事実は，当時，大学多数派としてそれまで学長を取っていた旧教養部・経営情報学部（当時）連合の学内勢力を潰すことだったようである。理事会で否決された教授はその連合軍の参謀役だった。対する経済学部と経営学部の連合軍は教員ポストや予算を狙って，まずはその教授を辞めさせることから攻撃開始したのだった。

理事会による特任教員採用案却下に対して，人間科学部教授会は当然ながら猛反発だった。当該の先生は宙ぶらりんな状態が続いた。人間科学部としては特任教員として認めているのだから，開講された授業の講師交代などままならぬ。しかし理事会は授業をさせない。授業期間が始まり，その先生の授業は「休講」が続いた。人間科学部教授会ではベテラン教員たちから，「経済学部と経営学部の牛耳る理事会に意見書を突きつけるべきだ」というような意見が次々と出た。「特任教員になるのはわれわれの当然の権利だ」という教員もいた。教授会は大混乱した。

その時だった。黒木先生が立ち上がって乾坤一擲，大きな声で発言した。「大事なのは学生たちなんですよ。休講を続けるなど，学生の不利益になることは避けるべきです！」。このとき先生の小さな体がとても大きく見えた。私はまだまだヒヨッコで，いまのように

教授会で意見を言うこともなかった。私と一緒に来た新しい先生の中にも，こんなにズバッと正論を言える先生の存在を間近で見て少し誇らしく思った。

しかしながら，教養部から流れてきた重鎮教授がすぐさま，「学生がどうのとか，甘っちょろいことを言うな！」と一喝した。そんなおかしな恫喝によって，黒木先生の発言はまさになかったことにされてしまったのだ。他の先生たちは誰も黒木先生のあとに続かなかった。学生のことより，教員の雇用の権利を守れ，そういう発言が続いたように思う。いまにして思うと漫画のような光景である。しかしこれが，黒木先生や私が経験した大経大赴任当初の事実だということは記録に留めておくべきだろう。

当時の大経大は，全員がほぼ守旧派だったと言える。彼らの認識では「共産党系か，反共産党系か」に即して全学で学長の取り合いをしていたものの，ようは2派に別れてそれぞれが自分たちの利権を維持しようとした。経営方針も教育理念も何もない。旧教養部を引き継いだ人間科学部でも，反共産党のほうが自分たちの分野にカネとモノとヒトがもらえると考える人たちと，むしろ共産党と組んだほうが得すると考える人たちとが拮抗した。いつだったか，人間科学部長選挙がなされたときも，大学全体と同様に，「共産党系」と「反共産党系」でそれぞれ候補が出された。結果はわずか一票差で「共産党系」候補が学部長となった。そのとき，黒木先生は「城さん，改革派の人物を学部長に選ぼう」とおっしゃった。しかし，どちらの候補を選んでも共産党系か反共産党系かの違いはあれ，守旧派でしかなかったのだった。

「大学設置基準」の「大綱化」によって廃止を迫られた教養部の教員たち。自分たちのポストを維持したかったのならば，最初からそのまま「教養学部」という看板にすればよかったはずだ。ところが大軽大レベルでそんなリベラルアーツ学部をつくって学生募集をしても誰も来ないことは明白だった。このことはのちに2024年度から開設される「国際共創学部」の不人気で後追い的に実証された。大経大を国際キリスト教大学のようにする，などという，まるで日本で共産主義革命を起こすと妄想するくらい常軌を逸した構想に現実性がないことは，2002年の人間科学部設置時点ですでに周知の事実だったのだ。

だから，教養部の先生たちは仕方なく，心理学を中心とした専門学部にした。しかしわずか数名の心理学教員しか新規採用しないという中途半端な対応だった。のちに経営情報学部が「情報社会学部」と看板替えした際にも，こうした中途半端な改編は続いた。こうして大経大では，いったい何の専門課程なのかよく分からない学部ばかりが生まれていった。それもみな，教員ポストの確保を中心に考えるからである。

二．人間科学部構築期での黒木先生の礎石

とにかく，私たちは大阪経済大学での教員生活をスタートした。2010年ごろには，ようやく人間科学部でも新規人事が開始できるようになった。「50名が13名に減るまでダメだ」という無茶な要求に対して，なんとか現在の「26名」を確保できたことが大きかった。

私はほとんどやる気もなくなって時間を無駄にしていたが，このころから黒木先生と，さらにスポーツ科学の福井孝明先生とに励まされて，人間科学部の改革を始めた。ちょう

ど私が人間科学部長になったこともあり，心理学，スポーツ科学，社会学という3本柱で，ただし経済学部のようなオーソドックスな学問教育などではなく，学生のニーズに即して実用的な知識とスキルを習得できる教育課程の構築を始めた。

理事会は相変わらずだった。当時の勝田泰久理事長は人間科学部がずっと社会学分野を担っていたことすらご存知なく，「情報社会学部」ができるときに，「どうして人間科学部も社会学コースをつくるのか」と，的外れな質問をして，私たちを困らせた。情報社会学部のほうが後から重複させてきたことすら認識がなかった。側近の教職員だけから偏った情報を受け取る傾向はいまも変わらない。とにかく新しい分野である心理学や社会学は，あらゆるエスタブリッシュメントから邪険に扱われた。ごく最近でも心理学分野の廃止という提案が経済学部所属の現在の山本俊一郎学長から理事会に出されたのは記憶に新しい。その後も何かするごとに，黒木先生や私らはいずれの立場の守旧派からも「暴走」のレッテルを貼られた。噂の出どころは明らかであり，いつも同じだった。教員たちの情報操作は見事である。

さてさて，こんな無茶苦茶な大学に来てしまい，黒木先生はどう思っておられただろうか？当然ながら黒木先生は，こんな大学に来てよかったと感じていたわけではない。奥さんにはいつもグチを聞いてもらっているとよく私に打ち明けておられた。そのたびに奥さんからは黒木先生に，「あなた，大学の教員なんて，ちょっとだけ授業して，会議すれば，高額の給与が出るのだから，悪くないでしょう。元気出して」と励まされたそうだ。

ただ，こんな大学に来なければ，黒木先生のキャリアもまた変わっていたのかもしれない。私のような者ですら，この大学に移らずにずっと国立大学にいれば，あるいはもっと歓迎される大学から声が掛かるまであと数年間待っていたならば，ずっと生産性が上がっていたのは確かだと思う。もちろん黒木先生の場合は周りの環境に関係なくパワーを発揮できる人だから，所属大学はあまり関係なかったかもしれない。それでもやはりこんな大学ではその才能を活かしきれなかったのではないかと思う。

じつのところ，黒木先生には何度かまともな大学から声が掛かっていた。しかしなぜか転出されなかった。その理由を私は詳しく聞かなかった。こんなトーテムポールの集合体のような経済大学にどうして定年まで在籍されたのだろうか。

やはり自ら新しい心理学分野をつくって，カウンセラーの後進を育てなければならないという責任感が大きかったと思う。たしかに幸いにも，大学院にはしっかりと優秀な大学院生が集まり，後進の育成ができた。大学院生たちと飲みに行った時はとても楽しそうに見守っておられる黒木先生の様子を拝見している。いまの私もそうだが，学生たちの楽しそうな顔を見ることだけが仕事の支えとなっている。逆に学生たちから，興味関心がないという態度をされると憂鬱になる。

言うまでもなく，いまの「心理臨床センター」をはじめとして，大学院人間科学研究科臨床心理学専攻ができたのは黒木先生の尽力のおかげである。人間科学部創設でA館建築をおこなったとき，黒木先生は近い将来を見据えてすでに「心理臨床センター」のスペースを確保した。じつは先生は案外と（？）政治的交渉が上手い。もっとも，2002年当時の

大学全体の雰囲気は本当に「旧態依然の大学」を改革する意欲があった。黒木先生もそれにうまく乗ったことはある。当時は井阪健一理事長だった。いまから振り返っても，理事長がしっかりしていたのは彼のときだけだ。やがて，「守りこそ改革」などと平然と嘯く守旧派の教員たちの巻き返しが始まり，自分たちの都合がよい財界人を連れてきて，まったくの「お飾り」に戻してしまった。

いまでも中堅若手のうち数名は才能のある人がいる。そんな人にはチャンスがあればこんな大学から移ることを薦めざるをえない。しかも，30代，40代の人たちは，定年までこの大学が維持されるかわからない。維持できても，いますでにそうであるように，どの授業も荒れ放題で，学生のほとんどがシラケてしまうようなクラスである。それだけでもストレスが溜まる。やはり実務家教員ならば自らの経験やスキルを，研究者教員ならば自らの研究内容を学生たちが目を輝かせて聴いてくるような大学で教えたほうがよいだろう。

「楽しみながらやうろな」という黒木先生の言葉をいまでも思い出しながら頑張っているが，正直だんだんと限界も感じる。20年前とは違い，いまは「高等教育機関」ではなくなりつつある。「鄧小平の言うように先に豊かになる学部をつくる」という触れ込みだった国際共創学部の大失敗は，没落の第一歩となった。「失敗でない」と強弁する姿は痛々しい。自由社会にある限り，市場メカニズムはどんなに足掻いても阻止できない。戦前と同じくまたもや「専門学校」に戻る日も近いだろう。いまこそ現実をしっかり認識しながら，せっかく，黒木先生が苦労してつくった人間科学部・人間科学研究科だけでも，頑張って維持したいと思う。

三．黒木先生の外国人好きと，共産党嫌い

ところで黒木先生が生前に私にくれた本が2冊ある。ひとつは『WiLL』（ワック出版）2016年5月号の特集号「日本共産党の正体」。もうひとつは村上春樹の小説『色彩を持たない多崎つくると，彼の巡礼の年』（文藝春秋・2013）である。

黒木先生は臨床心理士として当然ながら，人々の生き方にコミットしていて，心の平穏を願っていただろう。その方法はいろいろとあるが，黒木先生が若い頃に同世代に流行った方法は，「特定の思想を信奉する」という古い自己保存の方法であった。この生き方はある意味で楽なやり方である。生涯で一つの思想を単純に信奉できるならば，心理的な悩みもなく，ひたすらその「教義」のまま歩めばストレスも抱え込まないだろう。

しかし21世紀の現在でそれができるような人はそういない。いまの学生たちでごく一部の「真面目」な学生（男子学生に多い）は，ときどき自分の生きる悩みを何らかの高尚な思想を信じることで解決しようとする者もいる。しかしそんな学生は稀だ。

とりわけ黒木先生の共産党嫌いはハッキリしていた。もちろん臨床心理学の手法として東洋的な感性は重視していたし，中国文化に対しては愛着があったと思う。しかし中国共産党の政治に対しては批判的だった。黒木先生がどれほど共産主義について研究したのか，また接触した時期があったのかなどは尋ねたことはない。しかしチベットの支援活動をし，弾圧する中共に対してはとても厳しかった。アメリカに長らく暮らしておられて，それに

対して中国で，自由や自主を妨害する国家組織的な弾圧がなされることを許せなかったのだろう。

そんな中共の隣国では，共産党団体が日本中の大学に溢れている。政治団体の第一目的はもちろん権力奪取である。政治思想，主義主張を個人が持つかどうかの話ではなく，外部の団体が大学に侵入していることが個人の自由と自主を奪っている。かつて日本や欧米の知識人たちが挙って共産党組織に入っていった。「理論と実践」などというヘーゲル流の古い思考に負けてしまったのだが，共産党に身を投じた時点で主体性はなくなってしまった。「理論」構築においては「孤独と自由」を愛するはずの知識人も，「実践」活動では一人寂しくいることに耐えられないのだろう。ならば，釣り仲間でもつくればよいのに，政治団体に入ってしまうのだ。

「知識人」と名の付くものたちのこうした20世紀の現象についてはいずれ解明されるだろう。しかし簡単に言えば，ある意味，セクハラもパワハラも大学教員だからやらないなどということはない訳であり，人間として「一人で寂しい」のは大学教員でも同じことだという話だ。それを「知識人の社会的責務としての実践」などと正当化するのだ。

さて，『WiLL』の特集号「日本共産党の正体」に掲載された論考のうち，黒木先生からどの論文がオススメだとは聞かされなかった。いずれの論考でもすでによく知られている（いや，最近では教員たちにも知られていない？）共産党のさまざまな問題点が指摘してある。

その中で私が興味を抱いた文章は，ルポライター横田由美子の「婦人街宣部隊に一日密着してみた」という報告文である。これもすでによく知られている共産党集団にいる人たちの状態を報告している。しかし改めて，「皆，すり込まれたかのように同じ答えを口にする」という彼女の指摘は興味深い。組織内の個人が一貫して，党が主張していることをそのまま自己のオリジナルであるのように話をする。いわば党本部に言われたままの言葉の「無断引用」である。

このルポで報告されたご婦人たちの例のように，なぜ普通の人がこうなるかというと，まずは仲間集団に取り込んでおいて，それから日本の政治や世界のことなど考えたことも

ない人たちに，一方的な情報を与えて，自分で考える機会も与えない，ある種の「情報統制」がなされるからである。普通の人たちは，憲法や軍備のことなど自らで書物を紐解いたり，データやニュースを調べたりせず，党の役人たちから聴いたことだけしか情報を得ない。まったく初めてのテーマに対して，メディアの影響論でよくある「皮下注射理論」のようにそのまま吸収する。「真面目」な人ほど，素直に受け入れるのである。

しかし政治団体に特徴的なことはさらに，党の役人から教えられた情報とは矛盾するような新たな情報に接したときである。情報そのものの吟味よりも，党関係者以外の人物たちに対して予め「彼らが言うことは全ておかしい」とすり込まれて，自動的に情報を頭から庶断するようになっている。

最近では，インターネットの状況について，自分の共感する個人のSNSだけフォローする「サイバーカスケード」や，そもそも自分の興味関心のある記事しか情報が出ないようにする「フィルターバブル」機能などによって，個人の「確証バイアス」がどんどん増大する現象が指摘されている。しかしそのような認知心理学的現象は，なにもネット時代だけでなく，古典的な政治集団においてすでに周知のことである。一方で固定的情報のすり込み，他方で異なる情報の遮断。新興宗教団体であれ，左右の政治団体であれ，感情操作も含めた認知構造の構築は古典的な手法である。ナチスや共産主義政治団体に典型的な方法だ。

私は高校生のときに，同じ高校の民青活動家（共産党の青年組織）に連れられて，民青の小グループ「勉強会」に出たことがある。このころから私は社会学者っぽく，「潜入」するのが好きだったのかもしれない。リーダー役の20代（？）の女性が中心となって，日本の政治のことなどについて「勉強」していた。あるとき，朝鮮戦争の話になり，「どちらが先に戦争を始めたのか」という質問をしたところ，そのリーダー女性は，「それはもう韓国に決まっている。逆に共産主義国家が戦争を仕掛けるわけがない」との返答だった。こうやって確証バイアスは増大していくのだ。

私は高校時代から非常に「不まじめ」だった。学校はよくサボった。あるとき勉強会の休憩時間にタバコを吸っていると，「城くんが高校生なのにタバコを吸っていることについてみんなで議論しよう」となった。こうして「モラル」も集団内で作られていく。ある意味でみなさん，とても「真面目」だった。私が大学で社会学を専攻に選んだのは，そうした社会規範そのものに疑問を持ち，研究対象にしたかったからだ。あるいは社会規範を構築する情報操作の仕組みに対する興味でもある。しかしながら，黒木先生のいう「共産党」の性質を身につけた人たちは，既存の規範を疑うような「不道徳」なことはしないのだろう。もし少しでも疑いを持てば「除名処分」がなされて，集団内部は常に純粋性が維持される仕組みになっている。

そしてそのような組織文化が，共産党員の教授たちによって，大学という公的教育研究機関にも持ち込まれてきた。これは大経大だけでなく，日本の大学全体の大きな問題である。政治組織が研究機関を操作すること，しかも本来は情報の「創造」をするべき大学が，固定的な情報の伝達機関となり，それ以外の情報を遮断する「隠蔽組織」となることが問

題だ。黒木先生がチベットの自由を侵害する中共の国家に批判的だったように，日本の「学問の自由」は誰が妨害しているのか，考えるべきだろう。

黒木先生はときどき私に，「本学の職員は共産党だ」と耳打ちをしていた。もちろんこれはごく一部の人に関してである。この言葉はしかし，いろいろに解釈できる。たしかに本当に共産党員の人間もいるだろう。また，共産党の教授たちと一体になり「仲間集団」をつくっている，という意味もあるかもしれない。仲間外れを恐れる性質だ。

しかしさらにいえば，党役人の言うままの婦人部の人たちのように，共産党の教授たちの言うままに情報を鵜呑みにしていて，逆にそれ以外の教員の意見はシャットアウトしているという認知パターンが，本学にいる一部の職員にもあるという意味だとも理解できるだろう。

驚くことに，学外から来ている財界の理事たちの中にも，教員のいう理屈そのままに影響されている人もいる。ようは他分野から大学教育機関に来たところで，何をどうすればよいかわからないのだろう。せっかく日経連の提言をもとに文科省が法人組織に外部から理事を入れるように制度化しても，誰もが日経連のトップたちのように大学教育に精通しているわけではない。

じつは大阪経済大学において，2002年に人間科学部ができたころには，教員たちは同窓会の OB たちを恐れていた。それまで 2 派閥に分かれてコップの中の喧嘩をしていたのだが，外部からまったく異邦人の産業界の人物がやってきて，理事会を統制した。どうやって彼らをうまく遇らうか，そればかりが教員の話題になっていた。

井坂元理事長下での北浜キャンパスの設置は，旧来型の教授たちが大反対する中で敢行された。また「著名人100名講演会」もブランド価値向上の安い投資である。それから見ると，A館の一部にカウンセリングルームをつくるなど，さっと理事会が決断すべきことである。いまは「即決の必要性」などと述べているが，何よりも守旧派がやっているのだから，何も決断することがない。

今でも財界から来た理事たちの中には，「大学の既成概念を超えた改革をする」と述べる人もいる。しかし抽象的に大風呂敷を広げるだけであり，具体的に，①既存の大学の概念とは何か，②それを乗り越えるためにどうするか，結果的にどうやれば本学のブランドは上がるか，これについては何も語らず，学内教職員に丸投げする。

結論的に言えば，既成の大学とは，象牙の塔に閉じこもった教職員主導で動いてきた大学である。これまで大学など公的教育機関は，偏った教職員に従って，平和，反戦，民主主義の教育だけやってきた。しかも，産業界に役立つ人材などは利益を求めるエゴイストをつくるだけだから反対だと言ってきた。

他方でそれを乗り越えるとは，社会のため，学生のための人材づくりをすることである。命の大切さに関して言うなら，公共交通機関が乗客の生物学的な生命を維持することを責務とするならば，教育業界は学生に社会的な生命を与えることである。

財界の求めたこうした大学改革は文部科学省を通じてたしかに法令となった。教員と職員と，内部の人間の雇用のためだけの大学ではなく，学生たちをしっかりと社会に必要な

人材として送り出す機関にすることが目的であった。「学問研究」などという，それこそ「甘いこと」は，もはや日本のほとんどの大学には必要ではない。社会に必要とされる大学かどうか，それが問題であった。文部科学省は教育上とくに優れたプログラムを考えた大学に「教育GP（質の高い大学教育推進プログラム）」という特別補助金を与えるなど，改革に乗り出した。

しかし本学では，いまや財界人も恐れるに足らずという空気が教職員に広がっている。それはよいが，財界から自分たちの大学の利益を守っているようで，そのうち大学そのものが潰れることに気がついていない。自由競争の社会にある大学として，教員が主人公だといくら叫んでも，社会は誰も聞いていない。小さな組織の枠の中で融合していても後悔しかない，そんな黒木先生のメッセージを理解したい。

四．巡礼：黒木先生の目指した心理学，そして大学のあり方

さて，こうした共産党の問題から，黒木先生が村上春樹の小説を推奨するのは必然だと言える。村上春樹を読むように私に奨めた黒木先生は，私が特定の思想に人生の意味を丸投げして逃げるような人間ではないことを理解してくれていたのだろう。村上春樹の小説に出てくる主人公たちはみな，深い悩みを抱えている。それを克服できないまま自殺する登場人物もいる。克服する主人公も，できなかった者への追悼の気持ちを持つことによってしか克服できない。あるいはそのような死に至った近親者や友人をずっと思い続ける主人公が現れる。単純に思想を信じて生きることもできない人間たちにとっては，今も生きている自分の拠り所は死者への想いしかないのだ。

黒木先生にいただいた村上春樹の小説『色彩を持たない多崎つくると，彼の巡礼の年』（2013年）では冒頭早くも，主人公の「多崎つくる」が，死だけを意識して生きてきたと書かれている。大学二年生のとき，高校時代の親友グループから突然に絶縁されて，その傷ついた心から死にそうな日々を送る。しかしやがてそのときいったい何が起きたのか，36歳になった主人公が真相を探る「巡礼」をする，そんな物語である。

主人公は人間の傷つきやすさを自覚しながら，自分が無になってしまうと感じる。確たる自分というものがなく，色彩や個性に欠けた空っぽの容器のようだと言う。彼のことを慕う女性からは，もっと自信を持てと言われても，36歳になった自分がいま何であるかが分からないのだ。しかし主人公は最後には，恋人に対して息苦しさや恐れを感じながらも，心からその温かみを求める。「深い森」に迷い込んでしまう前に，もし彼女が自分を受け入れてくれるならば，自分に差し出せるものを差し出そうと決心する。「強く信じることのできる自分」がすべて消えてしまったわけではないと言い聞かせながら。こんな内容の小説である。

ここまで自分について悩む主人公に対しては，政治思想を掲げる者たちにとってはもどかしいかもしれない。共産主義思想に従って，さっさと行動しなさい，と言うだろう。しかし悩む自由のある社会こそが大事なのだ。それを許さず，党中央の司令通りに何も考えずに猪突猛進すれば自己確立できる，などという社会と個人の在り方は黒木先生には受け

入れられない。そして，すぐにどこかの党派に入って「実践」し，他者にも強要するような「知識人」も，黒木先生には受け入れ難いだろう。

小説の主人公は高校時代，それぞれに個性で輝いている仲間たちと一体感のあるひとつの共同体をつくっていた。それに比べると東京の大学では授業は凡庸で，知り合いは平板で無個性に見えた。唯一，主人公が東京の大学で親しくなった友人は，自由な生き方を望む青年だった。この年下の友人は１つの場所に縛り付けられるのを嫌い，自由な生き方をしたいという。「自由を奪われた人間は必ず誰かを憎むようになります。僕はそういう生き方をしたくない」。彼が大学に求めるのは自由な環境と時間を手にすることだけである。そして自由にものを考えるというのは，つまるところ自分の肉体を離れるということだという。「多くの人は時に応じて知らず知らずそれを行い，そうすることでなんとか正気を保っています」。自由になるためには枠を壊すことを恐れないことだというのである。

黒木先生が大学に求めたものは，簡単にいえばそういうことなのだろう。しかしそれがなかなか実現されない事実を前にして，それこそ大学組織に内在したり，あるときはそこから超越して，「色彩をもたない」自分から奪われた信念を再び取り戻そうとされていたに違いない。

黒木先生がどうしてアメリカに旅立ったのか，その理由を私は聞かなかった。てっきり一流のカウンセラーになるための修行だと決め込んでいた。それももちろんあるだろう。しかし日本で，関西で，若き黒木青年にとって遠くアメリカに旅立つ必然性が何かあったのかもしれない。そして船から投げ出された人間のように，自由を求めてアメリカで異邦人として孤独な漂流をしていたのだろうか。本学に着任してまもなく，すでに亡くなられた米文学の山田裕康先生と黒木先生と私の３人で大学近くの居酒屋で飲んだことがある。お二人はともにアメリカでの放浪が懐かしいのか，随分と話が弾んでいた。山田先生も自由を求めて生きておられた。

だから黒木先生は国籍に関係なく日本に暮らす外国人にやたらと優しかった。彼は共産党の統治は嫌いだが，中国人留学生の面倒見はとてもよかった。政府組織と人間そのものとは彼の中でまったく別のものとして認識されていた。また台湾人ママさんがいる上新庄のスナックには次々とボトルを入れた。いまでもまだ数本は残っているはずだ。そのスナックでいつも歌っていたのは，浜田省吾「もうひとつの土曜日」（英文のタイトルは「We are still on the road」となっている・1985年）だった。決して上手とは言えないが，じっくりと自分に言い聞かせるように歌っておられた。さらにときどきテレサ・テン「空港」（だったと思う・1974年，再版は1992年）をママさんに捧げて熱唱した（ちなみにいつも一緒の福井孝明先生は井上陽水の「リバーサイドホテル」，私は佐野元春の「バルセロナの夜」）。

さて小説は，仲間から外されて16年後，36歳になった主人公がようやく真相を探るべく「巡礼」の旅に出る話へと展開する。それでわかったのは，医者の娘だったグループ仲間の一人が地元名古屋の音楽大学に進んでから，あるときこの主人公にレイプされたと仲間に訴えたことが仲間外れになった原因だったということである。レイプ犯を彼女はなぜ自

分に押し付ける嘘をついたのか。「巡礼」を終えた主人公は，彼女が高校時代の仲良しグループを解体したかったからだと推測する。調和し幸福感に満ちた楽園はいつか失われるのであり，その迫り来る現実に彼女は耐えられなかった。しかも彼女はその輪の外部に自分で乗り越えられないから主人公を背教者に仕立て，彼を踏み台にして閉塞した壁を乗り越えようとしたのだろう，そのように思い巡らす。自由な個人として自分の肉体を離れ，既存の枠を乗り越えることを彼女はうまくできなかった。学生時代の夢のような時間からやがて大人社会に出ていくことの精神的不安というモチーフは，『ノルウェイの森』など村上作品の主要テーマである。

主人公は巡礼の最後に，仲間だったもう一人の女性が住むフィンランドに行き着く。そして再開した二人はそこで，亡くなった女の子に関わってきたこれまでの自分たちの辛い体験を互いに語りあい，そして互いのことを思って抱き合う。人の心と人の心は調和だけで結びついているのではない。それはむしろ傷と傷によって深く結びついているのだ。痛みと痛みによって，危うさと危うさによって繋がっているのだ。主人公はそのことをようやく理解したのだった。

日本に戻ってきて黒木先生が，共同体をなくした日本社会で，しかも自由になろうとして平板な社会組織に融合されてしまう社会で，心を病んだ人たちに寄り添う仕事に就いたのは道理である。小説の中で旅館の客として登場する男性が語っているように，自分の人生が薄っぺらで深みを欠いたものだと悟ったとしても，そのような平板な現実社会を人は生きていく。だから少しでも生きる価値を自分の身に纏わりつけなければならない。黒木先生はカウンセラーとしてそれを助ける仕事を選んだのだろう。

また，研究活動においても黒木先生は「お遍路」による心の整理について探究しておられる。「巡礼」による他者との触れ合いが心理的に作用する側面に注目されたのだが，しかし同時に「巡礼」は，自分のこれまでの経験，とりわけ傷ついた体験を自らで真相を探り心の整理をするための作業でもあることに着目しておられたのだろう。

黒木先生の遺稿となった「次世代の統合的心理療法」（『大阪経大論集』第74巻第3号，2023年）には，「自然治癒力」の話が出てくる。これは村上春樹が小説で主人公の友人の言葉を借りながら，人間はみな無意識のうちに肉体の制約を離れて自由に思考することで正気を維持している，と述べていることに通じているように思う。外側から政治思想によって理論武装の鎧を与えられるのではなく，人は自らの治癒する力によって，自分とは何かを理解し，自分への信念を取り戻すのだろう。

同時にこの遺稿で黒木先生は，「利他の姿勢」にも着目し，「私とあなたとの関係性の中に自然治癒力は表れます」と書いておられる。興味深いことにここで黒木先生は稲盛和夫の著書を引用して，こうした関係性は修行僧の托鉢の行において五百円玉を喜捨した女性の行動にも表れていると記述している。またチベットの人たちが自分のためには祈らず，家族や他人のために祈ることも，「利他の心」であるという。さらには黒木先生が自宅で飼っていた二匹の猫（サスケちゃんとハズキちゃん）にも，他人の不幸に際して「寄り添い崇高なことをすることが多々ある」と指摘している。人間のほうが逆にそのような動物

に自然に備わった天然のパターンが欠如して，児童虐待につながるとも書いておられる。

人間の「賢さ」ゆえに，社会組織を無駄に強化してしまい，もともと自然にあった治癒力と利他の心を失っていく。そのように個人に自由の喪失を強いる国家や団体組織の問題を，黒木先生の心理学は行間において語っているように私は思う。

村上作品は，文中にさまざまなブランド物が登場し，また人物描写や室内描写がとても細かいのに比べて，季節の表現がほとんどなくあっさりしている。たしかに村上春樹とともに現代に生きる都会の読者層はコンクリートに囲まれた空間のなかで季節を感じない。人々が感じない季節感は記憶になく，だから村上もその通りに描写から除外するのだろう。四季の感覚がない社会，それは人間の自然な共同体がない社会でもある。

晩年，黒木先生は四季の移り変わりを感じるために神戸の布引の滝をよく散歩した。また，人と人とのつながりを確認するために四国までお遍路の旅に出た。そして同時にそうした作業は，自分のこれまでの人生を納得させるための旅だったのかもしれない。

小説のラストシーンで主人公は，ラザール・ベルマンの演奏するリストの「巡礼の年」とくに第一年「スイス」に含まれる第 8 曲「ル・マル・デュ・ペイ」を聴きながら，自らの旅を振り返る。フィンランドで会った旧友が，あの素敵な時代は二度と戻ってこない，いろんな美しい可能性が時の流れに吸い込まれて消えてしまった，と述べたとき，主人公は彼女にこう伝えたかったと述べる。「すべてが時の流れに消えてしまったわけじゃないんだ。輝いた若い時代の強い信念は，そのまま虚しく消えてしまうことはない」と。

そして，黒木先生は，黒木青年は，自然に帰っていった。体内に宿る病巣の影を振り払いながら，人々と，家族と，あるいは猫たちと肌を寄せながらよく生きてくださった。小説でその旧友が主人公に言っていた言葉が思い出される。「君はいなくなったけれど，君はいつもそこにいた」。

黒木先生，どうか安らかに，そしてこれからも自由な旅を楽しんでください。